

日本における角筆文献研究の現状と今後の課題

小林芳規（広島大学名誉教授・徳島文理大学教授）

紙面を凹ませて文字を書くという筆記方法が曾てこの世に存在し、その古文献が東アジアでは20世紀後半に発見された。※ 今、21世紀の新しい研究分野として開拓されつつある。今回の国際学術シンポジウムの南豊鉉博士とアンドレアス・ニーヴァーゲルト博士の資料を拝見して大きな勇気を与えられた。角筆文献研究の重要性と、研究を発展させるために困難な問題を乗り越えて進まなければならないという共通の認識を得たからである。

※「発見」とは、新たな事物を見付けると共に研究資料としての価値を見出すことであり、単なる物として見付ける「発掘」と区別する。

私に与えられたテーマは、「日本における角筆文献研究の現状と今後の課題」であるが、角筆文献の発掘を進めて行くうちに、日本だけでなく、韓国、中国という東アジアに広がって来たので、東アジアの中での角筆文献研究という視点で発表する。

I 東アジアの角筆文献の発掘

1. 日本で角筆文献が初めて発見されたのは、45年前の1961年（昭和36年）秋である。角筆文献とは、角筆※※という筆記具の先端で紙面を押し凹ませて文字や絵や符号などを書いた古文献をいう。19世紀以前の古文献は、一般に毛筆を使って書かれた。毛筆が墨の跡を黒く残すのに対して、角筆は凹みであるから、“色”が全く着かない。そのために、今まで古文献の研究者に見逃されて来た。

※※1 角筆という名称は、11世紀（平安時代）の『篁物語』（たかむらものがたり）という作り物語の中に平仮名で「かくひち」と書かれ、『江家次第』（ごうけしだい）という古記録には漢字で「角筆」と書かれて、使われていた。

※※2 角筆の材質は、堅い木（資料集。及び写真①）または象牙（写真②）または竹（写真③）である。象牙は高貴の方が用いるなど、身分によって使い分けることもあった。角筆の遺物は、今までに40本が発掘されている。木製や竹製の角筆は、使っている間に先端が割れて、その隙間に昔の和紙の繊維（楮（こうぞ）など）の突きささったものもある（写真④⑤）。

※※3 角筆が筆記具であると考えられていたことは、15世紀（1486、文明18年）の百科風通俗辞書の『類集文字抄』（るいじゅうもじしょう）の「文筆」の中に、「筆（フデ）」と並んで「角筆（カクヒツ）」が挙げていることから知られる。

角筆文献は、最初の第一号が発見されて以来、毎年発掘が続き、2006年までに昔の都があった近畿の古社寺を中心に、日本全国から3,350点※※※を越える文献が発掘されている。

※※※1. 時代一紙本では、年代明記の最古の角筆文献は、正倉院文書の749年（天平勝宝元年）に大納言藤原家から東大寺司務所に宛てた上申文書（牒）である（写真⑥）。最も新しい角筆文献は、1914年（大正3年）の東恩納寛惇（ひがしおんなかんじゅん）著『尚泰侯実録』（しょうたいこうじつろく）の自筆原稿であり、人名などの漢字が書き入れられている。この間、9世紀（平安時代）から19世紀（明治時代）の各時代にわたって、角筆文献が遺存している。（小林芳規『角筆文献研究導論 中巻 日本国内篇（上）』2004年）。木簡では7世紀末の「藤原宮址木簡」や8世紀の「平城宮址木簡」に板面を凹ませて、文字や符号

が書かれている。

※※※ 2. 地域—北は北海道から南は沖縄石垣島まで、日本全国47都道府県のすべての県下の旧家、古文書館、図書館、博物館や古社寺などから角筆文献が発掘された。角筆が曾て日本において全国的に使われた事が分って来た。地方の角筆文献には、それぞれの土地の方言が反映されている。(小林芳規『角筆文献研究導論 下巻 日本国内篇(下)』2004年) (「資料集」 ページ。角筆地図)

※※※ 3. 言語内容—一番多く遺存している角筆文献は、仏教の経典や漢籍(中国古典)の漢字文(中国語文)を日本語で読解するとき、その漢字文で書かれた古典籍に、発音や日本語の読み方や注解を角筆で書き入れたものである(写真⑦)。これは古代の日本の学問が経典や漢籍を読解し、その言語と共に思想を受容することを方法としたからである。

角筆は、講義を聴講する時にメモとして書き入れたり、大切な書物を汚さなかったり、毛筆による墨継ぎの不便さを補ったりして、学習するのに適していた。また、角筆は旅行などにも持ち歩いた。

角筆は、漢文の読解だけでなく、日本古典の平仮名文の注解や、和歌の推敲、漢字の修得、秘密の手紙、古文書のメモ書き、あるいは絵の下書きなど多種多様に用いられた。

※※※ 4. 本の体裁—卷子本、冊子本、折紙(一枚物)など、どの体裁の本にも角筆の書き入れが見られる。多くは、写本・版本の欄外、行間、表紙などの空白部に書き入れられるが、全文が角筆だけで書かれた100ページの冊子本や、4通の手紙の全文が角筆だけで書かれた文献(写真⑧)も発掘され始めた。(小林芳規「角筆書(全文)折本二帖の出現とその史料価値」古文書研究第62号、2000年9月)

2. 韓国における角筆文献の発見と、日本に伝来した新羅(8世紀)の角筆文献

2000年7月の訪韓調査において、韓国で初めて角筆文献が発見されたのが切掛けとなって、8世紀に日本に伝来した新羅経典に新羅方式の読解を角筆で書き入れた古経巻が日本で発掘された。

京都・大谷大学蔵の『判比量論』(残簡一卷)は、新羅僧の元暁が撰述した経典で、8世紀に日本に伝来し、光明皇后(701—760)の蔵書になったもので、皇后の私印が押されてある。角筆の書き入れは、私印が押される前に施されたもので、新羅語の読解や節博士などが認められた。(写真⑨⑩)

(小林芳規『角筆文献研究導論 上巻 東アジア篇』2004年)

3. 中国大陸の角筆文献の発掘

(1) 漢代木簡—1985年(昭和60年)の中国出講の折、中国各地の角筆文献調査を行い、二千年前の『武威漢簡』から角筆の符号の書き入れを見出した。(小林芳規『角筆文献の国語学的研究』1987年) その後、台湾台北市中央研究院語言研究所蔵の『居延漢簡』に角筆で書き入れた文字と考えられる「刻文」を確認した。(小林芳規『角筆文献研究導論 上巻 東アジア篇』2004年)

(2) 敦煌文献—1993年(平成5年)の大英図書館の調査、及び吉沢康和博士等の大英図書館・パリ—国立図書館の調査、2000年の台湾国家図書館の調査で、5世紀から10世紀の各世紀の敦煌文献に、角筆による漢字の字音注・義注(写真⑪)や節博士、句切符などの書き入れられているのを44点発見した。(小林芳規『角筆文献研究導論 上巻 東アジア篇』2004年)

(3) 宋版一切経—日本に伝来した宋版一切経(1079~1173年刊、1191年重雕)に角筆

による漢字注、節博士、句切点、韓国の点吐（ヲコト点）に酷似した複点（内容は異なる）が施されているのが発見された。

(4) 明代・清代文献—明代・清代の写本・刊本からも角筆の諸符号の書き入れられた諸文献が発掘されている。

II 東アジアの角筆文献の内容上の特色、現在の研究状況

1. 日本・韓国・中国の角筆文献に共通するのは、仏教の經典の漢字文を読解するために、その古典籍に角筆で漢字の字音注・義注や節博士・句切符などの諸符号を書き入れていることである。読解にはそれぞれの国の言語を用いるが、字音注・義注の方式や節博士・句切符などの諸符号には、共通性が認められる。そこには影響関係が考えられ、東アジアにおける言語文化の交流を課題とする考察が進められる。

(1) 韓国の新羅と日本の8世紀の角筆文献の関係

大谷大学蔵『判比量論』に角筆で新羅語の読解や節博士などが書き入れられていることが判明したのに連動して、日本の8世紀の『華嚴經』などの古写経にも角筆による訓読の仮名や節博士などが書き入れられていることが発見され、次々と発掘が続いている。その内容は、『判比量論』の新羅方式に大同であり、日本の經典読解において訓点を書き入れる方法は新羅に源があるという説が出されている。(小林芳規「日本の訓点の一元流」汲古49号、2006年)

関連して、日本の片仮名も既に8世紀の角筆の書き入れに用いられていて、『判比量論』の省画体の仮名に通ずるところから、片仮名の起源も新羅にあると説かれる。

(2) 中国の敦煌文献と日本の天台宗の角筆文献の関係

敦煌文献の角筆の符号の中には、節博士や漢字の四声を斜線で示したのがあり、10世紀の日本の訓点にも同じ符号の用いられたものがある。このように、天台宗の留学僧によって日本にもたらされと考えられるものがある。(小林芳規『角筆文献研究導論 上巻 東アジア篇』2004年)

(3) 中国宋代の經典読解と韓国・日本の読解方法との関連

宋版一切経に角筆で書き入れた符号は、中国宋代の經典読解を具体的に語る新資料の見通しのもとに、符号が韓国の点吐（ヲコト点）や節博士などに共通するものもあるが、相違もあるので、その影響関係や、日本の訓点との比較など、考察が始った。

2. 日本・韓国・中国の角筆文献は、当初は影響関係を持ちながらも、それぞれの国で独自の発展を遂げたと考えられる。

日本では次のような特色が指摘されている。

(1) 經典の読解において、訓点を角筆で書き入れることは、8世紀（奈良時代）から見られるが、9世紀（平安時代）になると、白点・朱点が用いられ、これが主流になるに伴い、角筆は白点・朱点の補いと共に、私的、メモ的な性格に傾き、言語の上では口頭語や規範に外れた表現が反映されるようになる。

例えば、10世紀前半期に角筆が書き入れられた石山寺蔵『沙弥十戒威儀經』では、当時の訓点の規範では片仮名を用いるのに反して、日常的な平仮名を用い（写真⑫）、当時の口頭語「ムズ」や俗語「オレ」（一人称）が用いられている。

(2) 地方において角筆で訓点を書き入れた文献には、その土地の方言を使ったものがある。（写真⑬は「ユク（行）」を東北方言で「ヨグ」と表している）（写真⑭は「キハメ（究）」を沖

縄方言で「チハメ」と表している)

日本語の方言の歴史を開拓する資料となる。

Ⅲ 今後の課題

1. 角筆文献の発見によって初めて、日本と韓国と中国という漢字文化圏の漢字文献を、いわば同じ土俵に上げて比較考察することが出来るようになった。それによって、東アジアにおける言語文化の交流の軌跡を辿ることが大きな課題である。
2. それには、先ず埋もれて眠っている新分野の角筆文献を発掘することが必要である。主なものを挙げる。
 - (1) 日本の8世紀(奈良時代)の角筆文献の発掘調査。
 - (2) 日本の9世紀(平安時代)に白点・朱点が使われ始めた時の角筆点との関連の調査。
 - (3) 世界に50,000点遺存するという敦煌文献の角筆文字・符号の調査。
 - (4) 日本の諸寺に伝存する宋版一切経の角筆文献の角筆文字・符号を通して中国宋代の經典読解資料の獲得。
3. 日本・韓国・中国それぞれにおける角筆文献の全体像の把握。
日本では角筆が經典読解以外にも多種多様に使われている。韓国でも角筆が經典読解以外に肖像画の下絵と古文書に使われている。(南豊鉉博士資料)
4. 角筆文字・符号の確認作業
 - (1) 角筆の書写年代の認定
角筆で書写年代を書いた文献は少ない。書写年代の書いてない文献について、書写年代をどう認定するか。
 - (2) 複数の研究者による確認の必要性
 - 1、000年以上経た角筆文献は保存状態や修補加工などによって凹みが消えかかり、読解するのが困難となる。熟練した技術と角筆スコープの機器が必須となるが、それでも完全な解読は難しい。誰でも容易に解読できるような角筆スコープの改良が望まれる。
5. 角筆研究の専門家の養成と言語学以外の関連分野の学者との共同研究